

卒業生の永遠の学舎 安歴博の近未来

高松 ゆたか

(七十四期)

30・5月の理事会に参加させて頂き、次の2点を提案する機会を頂きました。

1 実力のある画家、彫刻家の作品を、寄贈いただき、保管、展示、学習に活用することを、検討していただけないか？

2 「天目茶碗」。今も中国のケンサン窯で焼き継がれている天目茶碗を、寄贈したい方がおられ、これをお受けして、お茶会などの企画に活用できないか？

1〜2の件、寄贈作品を所有して、安歴博の魅力を加え、存在感と参観者の増員に寄与できないかと思ひ、会議に参加させて頂きました。

結論を申し上げますと「1、2ともに受け入れは困難」とのことでした。ここで話は終わりなのですが、私はこれを機会に、安歴博の近未来のあり方をイメージしてみました。

1 安歴博、安積の校舎で学んだ多くの卒業生と、現役と、これから安積を目指す学生

の、永遠に屹立する学舎である。

2 安歴博は、今でも学びの場にふさわしい雰囲気を保ち、器として生きているので、学びの向上心のやまない卒業生らが、更なる切磋琢磨の場にした。

3 安歴博は、既に、多くの卒業生から理系、文系の専門家を輩出しているが今、立ち止まって検討すべきは、包括的芸術系の見直しが必要かと。

4 安歴博は、今重点的に進めたいのは、新卒生や現役生に加えて、郡山市民の多様なアーティストたちの利用活用のあり方ではないのか。

5 安歴博は、カンパ、ボランティアの協力により運営されることを検討いただき、私たちの安歴博は、地域の方々と共にあることを柱にしたいものです。

私も、卒業後は、自主自立で前進あるのみの、坂道をたどって来たように思えます。母校を振り返ることも、恩師を訪ねることもなく、自分の世界にいて、自分の目標に向かってのみ、自然を題材にアトリエで過ごし今に至りました。その過程で、絵とは何か、自分とは何か、自然を題材にアトリエで過ごし今に至りました。その過程で、絵とは何か、自分とは何か、何を表

現したいのか、身に付けた、表現と技術の方法を、これから絵を描きたい方々に出会った時、幼児でも、大人でも、手ほどきをどう進めるか、絵を目指す方々が、確実に進捗を確認できる一本道に、気づいたように思えます。

水田先生に絵の薫陶を受け、津口校長に「おれが卒業させてやる」、重箱先生から「校長がいいと言っている。東京さ、いげろ」。3学期をほぼ全休して上京、絵の道に入りました。以来50年以上経ち、絵かきとしての自信十分です。ただアンチなスタンスは学生以来で、作風は、壊れるかもしれませんが、いよいよ、完成度の高い、責任の持てる作品に向かいたいところです。

安歴博の5月の理事会の後、同期の島影建築工房に寄り、事の次第を話しました。「俺は今、小原田に子供を含む近隣住民の、多目的建築の依頼を受け、アートの作品展示も含まれている。ローカルな町でも、アートの展示構想はあるんだよナ」。「現地を見に、いがねがい」「ん、いぐいぐ」。

帰りしな「俺は今、忙しから、ユダガ、原稿書け、頼んだぞ」何年たっても、智は友である。